

展示されているゲルの中で。「どう、この生活スタイル。シンプル・イズ・ベストでしょ」  
—大阪府吹田市、国立民族学博物館(撮影・大森武)



人々が家畜とともに広大な草原を移動して暮らす遊牧。「草と水を求めて、あてもなくさまよう」という見方はまったくの誤解で、実際は天然の牧草を活用した計画的な牧畜だ。農業よりも環境にやさしく、都市のような巨大な仕組みも必要としない。悠久の大地に息づくモンゴルの遊牧社会を研究する国立民族学博物館の小長谷有紀助教授は、「分散型」で「持続可能性」に富んだ遊牧という生活様式こそ、二十一世紀の文明の在り方を考えるヒントがあるという。  
(三上喜美男)

### 編集委員 いんたびゅー

「遊牧を『遅れたもの』(明)はcivilian(市民)とする考え方が、まだ根の、都市に暮らす市民からきている。これに對

「私は以前から『遊牧』してnomad(遊牧民)文明」という言葉を使っは『文化』や『文明』の明」という組み合わせをわかない者たち。やはり、意外に感じる人も多いよ遊牧を遅れたものとするうです。英語でもculture(文化)とい—その遊牧を、農耕や言葉はcultivate(耕す)、つまり農の「文明」と…

耕が語源ですし、civilization(文)の手で書かれたモンゴ

# 遊牧はもう一つの文明

しています。これまでのような暮らしや社会、環境を維持するのが困難になってきました。今日と同じ日が明日も続くとはかぎらない。変わらざるにいうことは、実は大変な努力がいるわけですね。遊牧社会を調べると、非常に高度な細かい技術で暮らして維持されていることが分かる」

小長谷助教授は、草原は実に豊かな地帯だという。テロ以降、異質なもののへの敵意が世界に広がっている。対立ではなく、学び合うこと「文明」が絶対ではないことを、まず知るべきだろう。

「二十世紀の私たちの『文明』はいわば『集積型』でした。土地など一定のものに集中投資して、大きな成果や利益を上げようとする。そうした投資と成果の集積が、都市を大きくする。しかしその集積が自然環境に負荷をかけ、破壊をもたらしている。ほどよく、家

## 分散型、持続性に学ぶ

畜を追って暮らす。家畜集積させて、環境とのバランスを取ればいければ、現実には難しい」  
「それに比べて遊牧社会はもともと『分散型』から遅れている」と思いますが、逆に七百年も変わらない驚異的な持続性にこそ、『文明』の「私たちが都市型文明も今、サステナビリティ(持続可能性)が課題とされています」  
「環境問題は地域を超えて地球規模にまで拡大

「考えてみれば、風力発電などの自然エネルギー

人間の知の限界をよく知っている。定住・都市型文明と遊牧という二つの『文明』が対等なパートナーとなるならば、それこそ災害り、二十一世紀をともに自然に直面しているか、自然に対してどう慢

きなや・ゆき 1957年、大阪府生まれ。京都大学大学院修了。モンゴル国立ウラナートル大学に留学。モンゴル国内モンゴル自治区で遊牧社会を調査。著書は「モンゴル草原の生活世界」(朝日選書)「モンゴル風物詩」(東京講義)など。